1

俺はその時、相当頭に来ていた。

何に対して肚を立てていたのかは明確ではない。とは云うものの、怒っていた理由が瞭然しない訳では決してなく、思い出される理由が色色あり過ぎて、もうどれのことなんだか判らなくなっていると云う意味である。

あれやこれや、思い出すだに怒りが込み上げて来る。

ムカッ肚が立つとはこのことである。

俺がその時肚を立てていた相手と云うのは他でもない。現在稀譚舎の看板雑誌である。『稀譚月報』誌上に『失われた妖怪たち』と云う小論文を好評連載中の多々良勝五郎先生――その人である。

ご存知だろうか。

世間と云うのは広いから、変わったご仁も大勢いるのだろうし、中にはご存知の方もいらっしゃるのかもしれないが――普通は知らないだろうと思う。

その連載と云うのは、名前だの形だのは残っているものの、性質や伝承が失われてしまった妖怪変化に就いて、日本でただひとり名刺に妖怪研究家と云う肩書きを臆面もなく印刷している多々良勝五郎先生が、該博且つ無益な知識を駆使して鋭い考察を加えると云う――どう頑張っても好事家しか読まないような類のものなのである。『稀譚月報』の熱心な読者でさえ読み飛ばしているのではなかろうか。科学万能時代の昨今、時代後れの化け物に就いて真面目に語る者などいないだろうし、語ったところで聞く者もまたいないのだろうと思う。だから、まあ好評連載と謳ってはいるものの、喜んでいるのは俺のような変わり者や、ごく一部の物好き連中だけだとは思う。

それでも、きちんとした出版社から発行されている、しかもそれなりの部数を誇る商業誌に毎月毎月頁を持っているのだから、それはそれで大したものだと――そう思う。

ただこの場合、称賛に値するのは斯様に利用価値の希薄な記事に手間と経費を割いてくれている稀譚舎並びに稀譚月報担当編集者の方なのであって、内容如何に依らず、一般読者を置いてけ堀にして好き勝手な記事を只管書き殴っている多々良先生の方は実に気楽なものではないかと――俺なんかは思うのだけれど。

いやいや。

言い訳をするようだが、決して貶している訳ではない。記事自体は大変面白いし、多々良先生の慧眼に恐れ入ることも多い。

何より世間様から白眼視されている妖怪愛好家の一人として、同好の士が脚光を浴びることは喜ばしいことである。

多々良先生のような人間が頑張ってくれるお蔭で妖怪やら民族学やらに世間の注目が少しでも集まるならば、それは大層好ましいことだと、俺なんかは考える。

焼け跡から立ち直ることにだけ腐心して、みんな余裕がなくなって、死に物狂いで頑張って、それで何とか取戻して――それはそれで仕方がないことだとは思うのだけれど、こう云う何でもアリの青天井の時期にこそ、不要なもの、無駄なものに心血を注ぐ馬鹿こそが必要なのじゃないかと、そうも思うからである。

慥かに喰うや喰わずの世の中なのだから、お化けのことを真剣に考える暇などありはしないだろう。お化けの研究など、科学の徒には迷信で、学識の徒には不謹慎で、常識人には非常識で、貧乏人には道楽である。でも、お化けも出ないような世の中がろくなもんじゃないと云うことは、戦争に行った者なら誰だって知っている筈なのだ。

だから、多々良先生の活躍は矢ッ張り好ましいことなのだ。連載が決まって、第一回目の原稿が活字となり、雑誌に載ったのを見た時は溜飲が下がった程だ。寧ろ内容が深くなり過ぎて読者に呆れられてしまったり、それは筆不精な多々良先生が原稿をおっことしたりして打ち切られたりしやしないかと俺は日日心配しているくらいなのである。ただ、当人は俺の忠告や進言なんかに貸す耳は、最初っから持ち合わせてやしないのだけれど。

何しろセンセイは変人なのだ。

センセイ――。

そう。俺は平素、多々良先生のことを尊敬と親しみを籠めてセンセイと呼び習わしている。文字で表記した場合は漢字にはなるまい。平仮名でもない。片仮名である。しかもセンセーと音引きにする発音だと思う。馬鹿にしている訳ではない。あくまで尊敬と親しみを籠めてそう呼ぶのである。そう。尊敬と親しみを籠めて。

何しろセンセイは博識だ。漢文も古文もすらすら読むし、つまらないことでも覚えている。元は理系で、ナントカ力学やらにも詳しいし天文や気象にも造詣が深い。おまけに歌謡曲にも強くて、少女歌劇なんかもご覧になる。しかも集中力が異様に発達している。

センセイは一度集中するともう他のモノは見えなくなるし聞こえなくなる人なのだ。町中であろうと深夜であろうと通夜の席上であろうと、何かを発見したり素晴らしい発想を得たりした時は、奇声を上げて興奮する。

いやいや。

繰り返すが、貶しているのではない。褒めているのである。センセイは凄い、凄いのだけれど、それはそれ、これはこれである。

センセイの仕事や才能に対する俺の評価と、センセイとの思い出に対する俺のムカッ肚は、まったく別の問題なのだ。

センセイと俺が出合ったのは、太平洋戦争の始まる前のことだから、もう彼此十二三年前のことになる筈である。

その頃俺はまだ十八かそこいらだった。十八と云えば純粋無垢な青年である。そんな時期にああ云う人物と出合っているのだから、困ったものである。

当時俺は左官だった。左官なのに――なのにという云い方は差別的だし変なのだが――矢鱈向学心に燃えていた。家は貧乏で、当然学校には行けなかったのだけれど、独学で懸命に勉学に勤しんでいた。勤しむとは云ってもそこは独学であるから、要するになけなしの小遣いを叩いて買った本を読む程度の細やかなものである。しかも、あまり買えないから繰り返し擦り切れる程読む。その頃読んだ本の内容は、だから異様に鮮明に覚えている。

中でも嵌っていたのが、虎の子の九十円を使い果たして手に入れた、柳田國男先生の『傳説』と云う新書である。

冒頭、傳説が一つの日本語として通用するやうになつたのはほんの近頃からのことである――と云うくだりを読んで、俺は無闇に興奮した。それまで伝説と云う言葉は、口語として市民権を得ていた訳ではなく、尚且もっと広い意味で使われていたものだったと云うのである。しかもそれが今の意味で定着したのは、四十年程前に高木敏雄先生とその友人達が、独逸語のザアゲ、仏蘭西語のレジャンドに相当する言葉として伝説を用いることを考案し、以降それが広まった――とまで云うのである。

言葉など生れた時からある訳で、つまり一個人にとっては天地開闢以来この世に備わっているものだと思っているのが普通ではあるまいか。

それが――。

なる程凡百ものには起源があるのだと、俺はそこに気づいた。どんなものも、取り敢えず誰かが創ったものなんだと知った。それで興奮したのだ。一気に読んだ。何度も読んだ。

日銭稼ぎに明け暮れて、三度の飯を喰うだけでそれはもう大変だと云うような状況下に於て、仕事をし乍ら片手間に出来る研究など高が知れていると云うものである。右手に鏝、左手に資料などと云う器用な真似は出来ないし、況や、過酷な肉体労働を終えた後に夜を徹して読書する――などと云う離れ業は、幾ら若くたって不可能なのである。知的好奇心は空腹にも睡魔にも勝てない。どんなに情熱を傾けていようとも、腹が空けば凹むし疲れれば矢ッ張り寝る。

俺は、幾度も書物の頁を涎で汚した。

身過ぎ世過ぎが儘ならぬ若造にとって、それは高尚な趣味と呼ぶよりなく、高尚な趣味と云うのは要するに厄介な病気に等しかったのだ。趣味だか染みだか知らねェが百年早ェと、親方に怒鳴られるだけの身の上だったのである。

ひとりだったら疾うに止めていただろう。

ところが――。

岸涯小僧

それで結局――俺は伝説自体に嵌った。

こうして考えてみると興奮した理由からは何だか外れているようにも思うのだが、元元化け物の話は無類に好きだったから、潜在的に持ち合わせていた素質が発露しただけだったのかもしれない。

どうであれ俺の興味の対象は伝説やら昔話やら言い伝えやらお化けやら――そうしたモノに集中してしまったのである。

俺は出来る範囲で関係資料を読み、話を聞き回った。民俗学という学問に就いては善く知らなかったから、集めた知識をどう体系化したものかはまったく判らなかったのだが、兎に角熱心だった。

しかし――。

俺は学者でも学生でもなく、単なる職人だったのである。赤貧のうえに物好きな、見習の左官に過ぎなかったのだ。

どれだけ熱心であろうとも左官の小僧の独学なんぞと云うものはそもそも大したものではない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。